

組織目標評価報告書（平成26年度）

部局名：

文学部

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標</p> <p>①学生サポート体制の充実 これまでの「文学部学生相談室」の機能をさらに充実させるべく、他部局と協議のうえ、4月からカウンセラーを2人に増員し、「文法経学生・院生相談ルーム」を開設した。今後この相談ルームの利用を学生に呼びかけ、学生のメンタルヘルスに問題が生じぬよう努力する。また、「文法経学生・院生キャリア相談ルーム」の利用を呼びかけ、キャリア支援に努める。さらに、キャリア開発、メンタルヘルスに関する教員研修会を開き、こうした問題に関する教員の認識を深める。</p> <p>②国際交流の推進による教育の充実 グローバル育成院やキャンパスアジアをはじめとする全学的な教育の国際化に連携し、文学部における教育の国際化に努める。また、新たな海外大学との協定拡大に努める。</p> <p>③教育成果の明示化のためのアンケート実施・分析 文学部の教育方針に照らし、教育成果の明示化につなげるために、様々な学生対象アンケートの実施・分析を行う。</p> <p>④実践型教育の高度化 大学所蔵資料を活用した学芸員養成教育を充実させることにより、地域と連携した実践型教育を充実させる。</p> <p>⑤教員の教育方法の向上 FD委員会を中心に教育方法改善に関する研修会を開き、教員の教育方法を向上させるよう努める。</p> <p>⑥教育体制の改革 現在の教員数に合わせて、充実した教育が実施できるよう、教育システムの改善を具体化する。</p> <p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>卒業生アンケート 入学生アンケート 協定文書 相談室利用者数</p>	<p>自己評価</p> <p>①「文法経学生・院生相談ルーム」の利用を呼びかけた結果、26年度(2月末までの集計)は相談者57名、相談件数106件の利用があった(ただし、4部局共通の相談ルームであるので、文学部学生の利用数は不明である)。学生のメンタルヘルスについては6月18日に、また発達障がいのある学生への学修支援については27年1月28日に教員研修会を開き、教員の認識を深めた。また、学生の就職活動時期の変更について、教員研修会を開いた(10月22日)。</p> <p>②ポーフォーム大学との部局間協定更新にあたって、ポーフォーム大学の外国語教育センターの夏期講習における修得単位を卒業要件単位として認定できるように協定を改定した。これにより7名が認定申請し、各2単位、計14単位を認定した。また、法学部教員との協議により、ベルリン自由大学との部局間協定を研究科間の協定に格上げした。これにより、4名の学生の受入、派遣が可能になった。なお、3月30日には、「大学のグローバル化を考える一留学生への受け入れに関わる課題と展望」と題した講演会・座談会を開催し、今後の文学部における教育の国際化のあり方を考える機会とする。</p> <p>③卒業生アンケート、入学生アンケート、さらに「人文学の基礎」、「人文学への招待」の履修学生にアンケートを実施し、その結果をFD委員会で分析した。これらについては教授会で詳細な報告があった。また、卒業生アンケートを実施し、社会人として必要な知識・能力に関する教育効果を検証した。</p> <p>④12月10日に第2回学芸員課程フォーラム「重要文化財と大学—学術資料の保管・公開・活用の未来—」を開催し、約100名が参加した。また、12月3日から12日にかけて学芸員課程の教育の一環として第2回学芸員課程企画展「重要文化財と岡山大学」を開催した。また今後の実践型教育の導入の準備として「文学部特別フィールドワーク・庭のかたちが生まれるとき—庭師と歩く後楽園」(11月24日)、「文学部特別フォーラム・土が器になるとき—備前焼の歴史と美学」(1月29日)を開催した(それぞれ約20名が参加)。1月20日には副専攻セミナー「語学の光と影」を開催し、語学を学ぶことの意義について講師の話をともに参加者全員で考えた。</p> <p>⑤FD委員会の主催によりFD研修会を開催し、約20名が参加した(3月6日)。この研修会では、導入教育のあり方について、授業評価の高かったクラスでの実践例にもとづき、検討を行った。また、Eラーニングの実践報告とそれについての意見交換があった。</p> <p>⑥教育システムの改革については、特に28年度のクォーター制60分授業の導入に向けて、新カリキュラム構想ワーキングを中心に、具体案を検討した。また、高等教育開発推進機構による企業アンケート、卒業生アンケートの結果を踏まえ、文法経3学部間の調整や大学執行部との意見交換を重ねながら、2月教授会での改革案の大枠の決定に至った。その他：転専修コースの選考方法を適正化した。</p>
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標</p> <p>①文学部プロジェクト研究の継続 異なる学問分野を専門とする教員による領域横断型の共同研究プロジェクトを継続し、学際的な研究をさらに発展させる。研究成果の公開にあたっては、論文作成に加え、学生・一般市民を対象とするシンポジウム等の開催を推奨する。</p> <p>②文学部主催講演会シリーズの継続と展開 文学部教員の研究ネットワークを活用した、外国人研究者による「ニホンガク最前線」シリーズを継続するとともに、若手教員による新企画をスタートし、学生向けの対話・交流型ワークショップ等を通じて研究と教育の一体化を図り、研究のさらなる活性化を促す。</p> <p>③科研の申請率、獲得率の向上の努力 科研申請率および獲得率の向上を目指して、教員研修会を開く。</p> <p>④資料室の整備 これまでの文学部教員の研究成果を整理し、随時、資料室で研究成果が閲覧できるようにする。</p> <p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>共同研究の実施状況 科研申請率</p>	<p>自己評価</p> <p>①文学部プロジェクト研究として合計6件、のべ27名の教員が参加する共同研究プロジェクトが実施された。各プロジェクト代表者の専門分野は日本史、倫理学、フランス文学、日本思想史、中国文学と多様であり、プロジェクトメンバーも、一部他部局教員を含む学際的な構成となっている。研究成果の一部は、シンポジウムや講演会として一般に公開した。</p> <p>②社会貢献領域に後述の通り、①の文学部プロジェクト研究と連動した企画を含む、さまざまな形態の講演会・シンポジウムを企画・実施したほか、教育領域欄に記載した通り、研究と教育の一体化を図った新たな授業形態も生み出した。</p> <p>③科研の申請率、獲得率の向上を目指し、教員研修会を開いたほか、個別の添削指導も実施した。しかし、結果的に申請率、獲得率ともに低下した。</p> <p>④これまでの文学部教員の研究成果を閲覧できる資料室を整備した。</p> <p>その他：文学部の研究活動をいっそう活性化するため、従来の「長期研修制度」に加えて、「特別研究期間制度」を新設し、一定の条件を満たした場合、教育、管理運営業務を免除し、研究に専念できる期間(半年間)を設けた。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標</p> <p>①各種公開講座の継続・充実 引き続き学外の市民向けの講座を積極的に展開する。</p> <p>②研究成果を市民に公開する講演会、シンポジウムの開催 教員の研究成果を講演会、シンポジウムの開催というかたちで社会に還元する。とりわけ、海外の研究者との共同研究に基づく講演会を開くことにより、地域の国際化に寄与するよう努める。</p> <p>③海外大学との交流推進 文学部の教育・研究の活性化、地域の国際化のため、さらに海外大学との協定を拡大する。さらに、留学生と日本人学生がともに学ぶことができるような多言語・多文化型共生協働拠点が形成できるよう、その準備に努める。</p> <p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>海外大学との協定 市民向け公開講座・シンポジウムの開催</p>	<p>自己評価</p> <p>①9月27日(土)より文学部公開講座「(貧困社会)への多様なアプローチ」全5回を開催した。55人が出席し、好評であった。文学部プロジェクト研究の一つと連動した企画である。外国人研究者等による日本研究の最先端を学生・一般市民に伝える「ニホンガク最前線」のシリーズでは、3回の講演会を企画・実施し、いずれも好評を博した。新企画「若者と家族のいまをみつめる」では、対話型ワークショップや映画上映+講演+会場討論という新しい形式を取り入れ、全3回を実施した。特に映画上映会には100名を超える参加者があり、会場アンケートでも非常に高い評価を得た。</p> <p>②上記以外に、単発の講演会企画を5件開催した。うち3件は、上記プロジェクト研究の成果に基づくものである。これらの催しはすべて一般市民に公開とし、ホームページや各種メディアを通じて広報した。</p> <p>③①の「ニホンガク最前線」全3回、②の単発企画の一部では、海外の研究者を招待した講演会を通じ、研究交流を活性化するとともに、大学と地域の国際化に寄与することができた。このうち中国の研究者の所属大学と、目下、交流協定締結の手続きが進行中である。また、外国語コミュニケーションの授業では日本人学生と留学生がともに学ぶ授業が実践されており、今後の多言語・多文化型共生共同拠点形成の準備がなされている。</p> <p>その他：文学部構成員による研究および学外・国外との研究交流の成果を社会貢献に役立てるための講演会等を実施するにあたって留意すべき手順を作業チャートして整理し、このような活動のさらなる活性化を促した。また、催しの事後の報告を文学部ホームページに掲載する手順も整理した。</p>
<p>【総括記述欄】</p> <p>執行部が中心となって、教育改革に向けて前進することができた。執行部、新カリキュラム構想WGで具体的な改革案を作成し、これについて2月定例教授会で承認を得た。教育改革については、他大学への視察を実施し、積極的な情報収集を行ったほか、大学における人文社会系学部の役割と連携について検討した。また、大学執行部と頻りに打合せを重ね、文部科学省法人支援課との意見交換も行った(10月29日、3月18日)。今後は承認された案を将来構想検討WGでブラッシュアップし、28年度の実施を目指す。</p> <p>活発な国際交流を行うことができた。今後、文学部の強みでもある、岡山地域に根ざした研究と、世界各地の社会、文化をトピックとした研究の連携を図りながら、海外の研究者との交流を深めるとともに、その幅を広げる。それによって、学生レベルでの交流も活性化させ、留学生の受入、派遣を拡大する。</p> <p>60分授業・クォーター制に合わせた授業科目一覧、時間割は作成したが、今後は、この新制度の利点を生かした新たな授業形態を構想する。</p> <p>科研の申請数、採択数を増やすべく努力する。</p>	